



善光寺藏



日本民芸館蔵

初期大津絵「不動明王」・「地藏菩薩」

大津絵は、江戸時代、近江の大津追分宿あたりで、街道を往来する旅人に売られた安価な民画で、寛永年間（十七世紀）に仏絵師による天神、戎大黒、青面金剛、阿弥陀佛などの神仏画にはじまるとされます。

元禄に入つて藤娘、若衆、太夫、槍持奴などの風俗画や、鬼の念仏、提灯釣鐘、座頭など世俗風刺の画題が現われ、徳目、俗信など様式の変遷を経ながらも描き続けられ幕末に到つてその歴史を閉じました。

いずれも無名の画工達による量産の作品ですが、数をこなすが故の速筆、簡素、練達の筆は、単純明快な描写に各々の画題の性格を描ききつて活き々きとした生命を宿しています。

ここに掲げました不動明王、地藏菩薩は共に初期大津絵神仏画を代表する作品です。火焰を背に破邪の剣を手に立つ不動尊の忿怒の姿、衆生済度の地藏尊の慈悲の姿を古拙の筆、簡素の彩色で表わしながら深く心を打つものがあるのは往時の人々の信仰の力によるものでありましょう。



善光寺藏